

令和4年度第1回大船渡市総合教育会議会議録

1 日 時

令和4年10月25日（金） 午後3時から午後4時40分まで

2 場 所

大船渡市役所 教育委員会会議室

3 出席者

(構成員) 市長 戸田公明、教育長 小松伸也、教育委員 柏崎正明、教育委員 村谷志保、
教育委員 鈴木晴紀、教育委員 清水恵子

(事務局) 教育次長 遠藤和枝、教育総務課課長補佐 金野幸恵、
学校統合推進室主幹 武田貴子、教育研究所指導係長 鈴木恒希、
教育研究所主任指導主事 和田智恵

4 意見交換

- (1) 確かな学力の育成について
- (2) 英語教育の推進について

5 会議の概要

(教育次長)

- ・ただいまから令和4年度第1回大船渡市総合教育会議を開会する。戸田市長からあいさつをお願いします。

(市長)

- ・ご多用中のところ出席いただき、また、日頃から教育行政の推進はもとより市政へのご理解とご協力に感謝する。
総合教育会議の役割は、教育行政の大綱の策定、教育の条件整備など重点的に構ずべき施策、児童生徒の生命・身体に関することの主に三つで、教育委員会と市長部局とで、より良い教育行政を目指していくための意見交換の場として年に1～2回開催している。新型コロナウイルス感染症の影響やGIGAスクール構想に基づいてタブレットの全員配付など、教育現場はかなり変化している。本日は、重要な二つのテーマが議題となる。一つは、生徒の学力向上について、もう一つは国際化の最初の一歩である英語教育についてである。二つのテーマについて、現状や今後の方向性について、意見交換したいと思う。

(教育次長)

- ・次第3 意見交換からの進行は、市長をお願いします。

(市長)

- ・(1) 確かな学力の育成について、事務局から説明を求める。

(和田主任指導主事)

- ・資料等に基づき説明。

(市長)

- ・ただ今の説明について、質問・意見等を求める。

(柏崎委員)

- ・標準学力検査等のデータ分析を事後指導に活かし、個に応じた学びへと結びつけていくことが重要である。理解度に応じた課題等の掲示によって、基礎基本をしっかりと身につけることが、自ら学び、主体的に判断・行動し、問題を解決しようとする力へとつながっていく。

(和田主任指導主事)

- ・「確かな学力育成プラン」でも、調査結果を分析することになっている。特に、標準学力検査は、生徒一人一人に個票が返ってくるので、学校ではその結果を活用して最適な指導を行ってほしい。

(柏崎委員)

- ・学力検査のデータは細かいので、場合によっては家庭と共有し、つまづいているところをしっかりと押さえてその後の対応に結び付ければ伸びていく。

(和田主任指導主事)

- ・学校全体または学級毎、そして個別の傾向を押さえることによって、どのような指導が必要かヒントになることから、ぜひ活用していきたい。

(教育長)

- ・当市では、標準学力検査、いわゆるNRTは、小学校2年生と5年生、中学校2年生を対象に実施している。また、文部科学省の全国学力・学習状況調査は小学校6年生、中学校3年生、岩手県の小・中学校学習定着度状況調査は、小学校5年生、中学校2年生を対象に実施されている。このほか、知能検査も実施しており、知能と学力の相関関係も見ることができるようになっている。

検査結果は、小問ごとに市・学校・個人のデータが出てくるので、個人分については学期面談の時に家庭用として渡すことができる。市全体の傾向についても、成績が落ち込んでいる部分、強化しなければいけない部分を校長会議などで話している。学校では基礎基本を重点的に指導しているが、すぐ結果に表れるというものではないので、長いスパンで考えていかなければならない。

(鈴木委員)

- ・NRTを4月に実施して、その結果分析を基に次年度担任が補充指導を行うより、教研式標準学力検査CRT、いわゆるCRTを12月頃に実施して3月に補充指導を行う方が、年度内担任が責任を持って、指導できるのではないか。

CRTを実施している学校はどのくらいあるか。

(和田主任指導主事)

- ・ほとんどの学校で実施している。ただし、CRTはまだ授業でやっていない問題は削除して、全問は解かない学校もある。12月に実施すると、授業していない範囲はカットすることになり、検査結果が正しく反映されないものとなる。

(鈴木委員)

- ・範囲は、11月か12月分までになるか。

(和田主任指導主事)

- ・学校によっては、1月や2月も授業をするので、難しいところもある。

(教育長)

- ・一長一短ある。C R Tは、担任が4月から授業を行い、その結果を見るために12月頃に検査すると、自分の指導力の判定にもなる。新年度、新しく担任になった先生が4月にN R Tをやると、昨年度の担任の指導力がどうだったかがわかる。鈴木委員のご発言は、C R Tでテストの結果を確認し、3学期にその補充指導をしっかりと行い、次年度の担任に引き継いでほしいという趣旨だ。

(市長)

- ・C R Tの実施時期等については、学校が独自に決定できるのか。

(教育長)

- ・学校で決定する。

(市長)

- ・了解した。

(村谷委員)

- ・どの教科も言葉の理解力が根底にないと、問題を正しく理解できない。先生方には、子どもたちが言葉の意味をわかっているか気にしながら授業を行ってほしい。言語能力を底上げできれば、成績も上向いてくるので、読書などが大事になると思う。

(和田主任指導主事)

- ・言語能力の育成は、県でも重点として捉えており、「確かな学力育成プラン」に必ず掲げるよう指示されている。学力向上委員会の国語部会でも読むことを意識した授業作りを進めており、すぐに結果を出すのは難しいが、意識して継続していくことが大事だ。

(清水委員)

- ・この資料からは、学力テストの結果に対し、市として何が課題でその原因が何か、そして原因を解消するための方策として何をしているか読み取れない。原因と結果、課題を、しっかり共有することによって、テストの調査結果などに活かされるのではないか。

小学生が中学生になる段階で学力が低下してしまう原因は何か。

(和田主任指導主事)

- ・国語、算数とも同じような領域が小中学校とも低下している。小学校で身につけておくべき基礎基本がなっていないと、中学校は上がらない。学力向上研究委員会では、この部分への指導法が課題と捉えており、指導主事と連携して、モデル授業や助言等により授業づくりの指導をしている。

(市長)

- ・教科ごとに弱い分野と強い分野があると思う。弱い分野について、授業の仕方を工夫するのか、個人ごとに指導に力を入れるのかどちらなのか。

(和田主任指導主事)

- ・生徒の大多数が低下している部分は、全体的な指導が必要だが、そうでない場合は個別指導が必要となるが、これからは子どもたちが自分で考え、解決していく力を付けなくてはならない。そのためには教科書どおり教えるのではなく、指導法を考える必要がある。

(市長)

- ・「まなびフェスト」について、意見はないか。

(柏崎委員)

- ・確かな学力を育むベースは、基礎基本をしっかり身につけることだ。その学年で押さえておくべきところは、その学年で頑張っって押さえる。わかる授業、楽しい学校であれば意欲を持って自ら学ぼうという気持ちになる。子どもたちはわかるようになりたい、認められたいという気持ちを常に持っており、自分もやればできる、先生や友達から認められた時などに自己肯定感を高め、前向きな気持ちになる。そこに先生たちや周りの子どもたちが、どうつなげていくかが大事になる。

(和田主任指導主事)

- ・岩手県小・中学校学習定着度状況調査では、今年度は昨年度より国語・算数・外国語全ての教科において、その授業が好きという割合が増加した。授業改善を行い、子どもたちの意欲が伸びたことは、今年度の学力向上研究委員会の成果と捉えている。

(鈴木委員)

- ・家庭学習は、授業と連動することで質の向上が図られると思うが、各学校ではどのような形で行われているか。

(鈴木係長)

- ・まなびフェストに家庭学習の習慣化を図ることを設けるなどしており、宿題は最低限行い、学年によってはプラス1人学習としている学校が多い。

(村谷委員)

- ・朝食や規則正しい生活習慣と学力は密接に関係しているとされている。家庭の習慣や親の行動は、学校だけでは変えにくい、学校からの粘り強い呼びかけなどが必要だと思うが、どのようにしているか。

(鈴木係長)

- ・学校、担任と保護者が一緒に考えていくことが大前提であるが、様々な家庭もあるので、学校が組織的に関わり、丁寧に対応しているのが現状である。

(教育長)

- ・校長会と教育委員会で、基本的な生活習慣について決まりを作って配布している。

(教育長)

- ・岩手型のまなびフェストは、学校で数値目標を立て、それを目指して取り組むことを目的として作られた。最近、コミュニティ・スクールの取組が始まったこともあり、数値目標化が薄れてきている。

(柏崎委員)

- ・まなびフェストは、学校・家庭で取り組む事項が具体化されており、家庭でも理解しやすく、素晴らしい取組だ。

(清水委員)

- ・まなびフェストは、各家庭で評価できるシステムになっていて、学期ごとに、子どもたちと振り返りする時に好材料だ。数値が低めに設定されていて、子どもたちが取り組みやすく大きな目標になっている印象があるので継続してほしい。

(市長)

- ・まなびフェストは、始まってから何年くらい経っているのか。

(鈴木委員)

- ・20年以上ではないか。

(市長)

- ・進学や社会に出るにつれて、自分で調べたり勉強することが非常に大切になり、生涯学習にもつながることから、小学生からの習慣化が大事だ。

(市長)

- ・次に、「英語教育の推進」について事務局から説明を求める。

(和田主任指導主事)

- ・資料に基づき説明。

(柏崎委員)

- ・中央公民館主催の英語体験教室は、未就学児や小学1、2年生が保護者とともに多数参加して好評だ。子どもたちが楽しみながら、基礎的な英語を学び、コミュニケーション能力を高めている。学校教育だけでなく、生涯教育の分野からも英語に親しむ機会が増えていくことはとても大切だ。

(教育次長)

- ・市民が意欲を持って様々な講座等に参加しており、語学の育成は、学校教育の範囲を超えた時代に来ていると感じる。

(教育長)

- ・海外からの復興支援やインバウンドなどの影響もあり、子どもたちは外国の方と臆せず会話している。英語が教科化になった5・6年生以外も、低学年から英語に慣れ親しんで知る。外国語指導助手の配置などの施策と相まって、中学校入学直後のテスト結果が上がっており、英語教育はいい傾向にある。

(村谷委員)

- ・英語検定の受験率が高く、合格率も目標に近づいている。検定料の全額補助や幼児期から英語に慣れ親しんでいることが背景にあるのではないか。日本人は英語を話すことに苦手意識があるが、子どもたちに間違いを恐れず会話することを教えれば、もっと意欲的になると思う。加えて、小中学校の連携がますます重要になる。

(清水委員)

- ・英語検定料の補助が開始されて5年位経過し、成果が表れている。他の教科でも同様の取組があれば、中学校になると成績が低下するという課題を解決できるのではないか。言葉の理解力を高めるために、読書の活用を研究するなど、大船渡市を特徴づける教育を展開していくことが大事だ。どのようにして、市に若い人を取り込み、定着させるかを考えたときに、教育は大きな柱の一つで、学校に安全に通学し、確かな学力を付けることができる地域としての学校体制があれば、目を向けてくれるのではないか。英語の取組を拡大し、他の教科の底上げを図ることを目的としたモデル事業ができればいい。

(市長)

- ・英語検定料の全額補助を始めてから、成果が表れていることは喜ばしい。英語検定料は300万円位の予算であるが、同等の予算で何か別の取組が考えられるか。

(清水委員)

- ・算数検定とか。

(教育長)

- ・数学検定や漢字検定がある。

(市長)

- ・それくらいはやってほしい。

(鈴木委員)

- ・岩手県英語確認調査で、全項目で県平均を上回ったのは、ALTを活用した授業の効果だと思う。教育懇談会で授業参観をしたときに教員とALTの関係もよく、とてもいい授業をしており、その積み重ねが子どもたちの英語力の向上につながる。

(柏崎委員)

- ・学校訪問で小学校の英語の授業を見ると、子どもたちは担任やALTと英語を楽しみながら、明るく生き生きした表情をしている。電子黒板やタブレットを効果的に活用しており、発音練習などはまさに最適な学びだ。

(和田主任指導主事)

- ・英語は他の教科より研修会や個別訪問が多く、先生と直接、授業づくりについて話すことができる。タブレットは、発音や発表の仕方などを子どもたち自身で見て、調整することができるので、ICTの活用は学力向上に有益であると実感している。

(市長)

- ・英語を学ぶ根本の意味を子どもたちに教えてほしい。歴史的に諸外国と知識、情報、技術などの壮大な交流があったからこそ、日本が発展してきた。海外の人から学ぶこと、そしてそのためにはコミュニケーションを取ることが非常に重要だ。今、日本はよその国に抜かれたような状態で、外国に行って学んでくる留学生も減っている。国の勢いはそういうところで形づくられることから、今後も英語力を継続的に伸ばしていく方向性にある。

(鈴木委員)

- ・確かな学力の育成、また英語教育のためには、教員の指導力、授業力が大事で、そのためにも学力向上研究委員会の役割が重要である。英語教育もこの取組が功を奏しており、今後もこの研究委員会が上手く機能すれば、市の学力も伸びていく。

(和田主任指導主事)

- ・現在、まとめに向けてモデル授業の学校への周知方法等について検討中であり、研究委員がいない学校にも広げていきたい。

(教育長)

- ・「教育は国家百年の大計」とか「教育は人なり」と言われている。自身の様々な経験や体験が人を作り、指導力を高めることにつながると先生方には常々話している。令和の教育は、タブレットやAIドリルなどのICTの活用が基本で、そうしないと世界からどんどん立ち遅れていく。人材を増やしていくことが日本の底力になる。

(市長)

- ・一つの科目やスポーツなどに突出した子どもは市内にいるか。

(和田主任指導主事)

- ・英語検定で準2級、2級を取得したり、美術、運動面の能力が高い子どもがいる。

(市長)

- ・その子どもたちには、頭を押さえつけずに自由にさせて、更に才能を伸ばしていく。同時に他の子どもたちを底上げすることが大事だ。

(教育長)

- ・全体として底上げする一方で、力のある子は、それを伸ばしていくことが必要だ。

(市長)

- ・スポーツでは、スーパーキッズとして種目ごとに選抜された子どもたちが才能を伸ばし、いい成績を収めている。数学オリンピックでは、国から選出された人が活躍している。学習の分野で突出した子どもには、その才能を伸ばすような制度などはないか。

(教育長)

- ・世界的には、2学年進級するなどの特別進級のようなものはある。

(市長)

- ・アメリカに移住し、コロナワクチンの原理を発明したハンガリー出身のカタリン・カリコ博士の本を読んだが、高校の時から生物学が非常に突出していて、先生方がその才能を見抜き育て上げて、ハンガリーの将来を嘱望される若手の科学者になったとあった。

(教育長)

- ・文部科学省の研究者が少なくなってきており、大学は個人研究ができないなど大変になっている。

(市長)

- ・国は、基金を作り限定された大学に補助金を交付する計画を進めているが、まだまだ足りない。充実させるためには、税収を上げて経済を元気にする。経済を元気にするためには科学技術レベルを上げる。そのためには勉強、学問ということで全てつながっている。

(清水委員)

- ・北里大学は、大船渡、越喜来が好きで調査に来る学生もいる。市役所に就職している人もいて、この地は魅力があると言っている。大学生と小中学生、高校生と交流の場を設け、研究の最前線ではどんなことをやっているのかなど具体的な企画があれば、大学では可能な限り支援をする協定を締結しているので活用してほしい。

(市長)

- ・いいお話だ。今までは市民を対象にした講座が多かったが、教育の面からも小中学生に刺激を与える講座があってもいい。

(鈴木委員)

- ・教員時代に北里大学の学生にバードウォッチング教室を開催してもらったことがある。鳥や昆虫の専門家が出て、子どもたちが興味を持ち、楽しみながら交流した。

(市長)

- ・北里大学との包括連携協定の活用を進めたい。

(教育次長)

- ・博物館では、海辺の生物観察会で北里大学の先生の協力をいただいております、更に他の事業にも広げていければいい。

(市長)

- ・小学生にとっては、大学生が富士山のような存在に見えて、うきうきして学ぶだろう。

(教育長)

- ・海辺の生物観察会は小学生にとっても好評だ。講師を依頼している教授の教え子や助手などに大勢来ていただいている。越喜来小学校は北里大学の協力を得て、川の学校とい

う冊子を作ったことがある。ぜひPRしていきたい。

(市長)

- ・市では、岩手大学、明治大学、立命館大学などの大学と協定を締結している。例えば、立命館大学は碓石海岸まつりでダンス部の舞台披露、盛町の七夕まつりなどで交流しているが、別の連携方法もあるのではないか。それは、こちらからの持ちかけ方次第なので教育委員会でぜひ検討してほしい。

(教育次長)

- ・以上をもって令和4年度第1回総合教育会議を終了する。